

謡の全盛期は続いたのです。

戦後の混乱と荒廃から社会が漸く落ち着きを取り戻した昭和二十四年八月、NHKラジオの〈うたのおばさん〉の番組がスタートし、戦後童謡の出発の大きな力となりました。ここでは〈レコード童謡〉との区別から〈童謡〉という語を排し、〈新しい子どもの歌〉を提唱しました。

〈新しい子どもの歌〉運動に参加したのは、主に「赤い鳥」系の詩人たちで、佐藤義美、まど・みちおがその先頭に立ちました。

新しい子どもの歌運動の特徴は、中田喜直を中心に、純音楽の気鋭の作曲家たちが推進力となった点でした。また、歌の対象を就学前の幼児に絞ったことも大きな特徴でした。それは、〈うたのおばさん〉という番組の指向性ではありましたが、「赤い鳥」には見られなかった幼児童謡を新しい時代の童謡として、平明さゆえの困難に挑んだ詩人たちの若々しい自覚でもありました。

〈新しい子どもの歌〉運動の詩人たちは、〈子どもの歌〉を名乗りながら、歌謡性に偏らぬ詩性の高い童謡を生み出していったのです。

この番組から生まれた「ぞうさん」(まど・みちお詩、團伊玖磨曲)は、象が象として生かされていることの歓びの歌ですが、ユニークな三拍子のスローワルツで、時代を画する童謡でした。関根栄一の「いたずらすすめ」、阪田寛

夫の「サッチャン」、サトウハチローの「とんとんともだち」等々、まさに童謡のルネッサンス時代の出現でした。

昭和二十八年、テレビ放送が開始され、三十六年、〈うたのおばさん〉を引き継ぐNHKテレビ〈うたのえほん〉が、スタートしました。聞くことに見る歓びが加わって、「おふるじゃぶじゃぶ」、「あめふりくまのこ」、「こゆび」等の楽しい歌が生まれました。

また、新時代のわらべうた、「おはなしゆびさん」、「あらどこだ」、「てをつなごう」等の遊び歌が、テレビ童謡の魅力を盛りあげました。殊に、「おもちゃのチャチャチャ」は、世界的流行の波に乗ったチャチャチャのリズムが子どもたちを席捲し、やがて、〈おもちゃのチャチャチャ〉を予兆のようにして、異質の童謡が現れはじめました。

昭和四十一年ビートルズの来日以後、日本の歌の世界は多様化し巨大化して、革命的ともいえる変化を遂げました。滔々としたポップスの流れは、童謡をもその渦中に巻き込まずにはおかなかったのです。

ヤンチャカチャボーズ ヤンチャリカ／と始まる「ヤンチャリカ」S 43、「北風小僧の寒太郎」S 47、フジテレビ『ひらけーポンキッキ』から生まれた「およげたいやきくん」S 50や、NHK『みんなのうた』の「山口さんちのツトムくん」S 51のように、爆発的にヒットし、子どもたちを喜ばせる歌が現れるようになりました。氾濫するCMソ